


# 物資だより

岡山県学校給食会会報  
物価動向特集号

 子どもたちに笑顔  
いっぱいのご給食時  
間をお届けします

第 110 号

平成21年2月1日

編集発行

岡山県学校給食会

岡山市浦安本町59番地の4

TEL 086-263-6465(代)

URL: <http://www.ogk.or.jp/>

## 平成21年度における 学校給食用物資価格の動向予測について

経済の先行きについては、当面、悪化が続くとみられ、急速な減産の動きなどが雇用の大幅な調整につながる懸念される。加えて、世界的な金融危機の深刻化や世界景気の一層の下振れ懸念、株式・為替市場の大幅な変動の影響など、景気をさらに下押しするリスクが存在することに留意する必要があるとされています。

20年の前半は、金融資本市場の変動、原油価格・穀物相場の世界的な高騰を受けて、食料品の大幅な値上げラッシュが続きました。

後半は一転し、サブプライム問題に端を発した金融危機を受けて景気の悪化、原油安、株安、円高により取り巻く環境は一転した。この環境は、今年も継続するものと思われます。

食品業界は、原料の高止まりは依然と続き、景気の低迷、消費の冷え込みが重なり、業界をめぐる経営環境は一段と厳しさを増しています。

一方、食の「安全・安心」では、中国産冷凍食品の農薬混入事件、乳製品へのメラミン混入事件、国内では、ウナギの産地偽装、事故米の食用転用、国産冷凍野菜の産地偽装等、事件が絶えない年でありました。

県内の、農産物（水稲）に影響を与える今年の気象は、台風の上陸もなく、おおむね天候に恵まれ作柄指数は良かったが、生産農家の経費負担（燃料費・肥料の高騰）増の影響がありました。

世界的には、地球温暖化とみられる気象変動の影響を受けて大雨（中国南部・欧州）・寒波（中国から中央アジア）の被害が目立ちました。さらに、経済成長国（BRICs）の消費拡大による輸入食品の流通変化、自国の食料確保による輸出規制等も見られます。

このような国内外の諸状況により、平成21年度の価格動向を予測することは極めて困難なことでありますが、本県学校給食会が収集した範囲で情報提供いたします。

### 1 基本物資

#### (1) 学校給食用小麦粉

小麦の政府売渡しが価格変動制となり、昨年4月に全銘柄平均で30%、10月には約10%の値上げとなったが、県内の学校給食用小麦粉の10月値上げ分は県学給と製粉業者が吸収した。

平成21年4月の輸入麦は、全銘柄平均で、10%程度の値下げの見込みであり、今年10月期の、輸入麦価の改定率は未定である。国産小麦については昨年秋に今年作の麦価が内定しており、値上げの見込みである。

これらの状況を基に今後、製粉工場と価格交渉して平成21年度学校給食用小麦粉価格（強力粉）、国産小麦粉（中力粉）が決定されるが、4月の値下がり分は昨年10月分の値上げで相殺されて、20年度当初の価格となるが見込まれる。

#### ア. 学校給食用パン

パンの副原料として使用される砂糖、県学給ショート、脱脂粉乳は概ね次のことが予想される。

砂糖は、大きな価格変動はないものと思われる。（詳細は常温物資欄）

県学給ショートは、据え置きの見込みである。

脱脂粉乳は、物量確保と価格交渉が実施され、オーストラリア等の増産が見込まれること、BRICs（ブラジル・ロシア・インド・中国）、中近東等の消費の低迷が見られ、需給バランスが崩れ、価格は弱含みに推移すると見込まれている。

パン加工賃については、今後パン組合と協議して決定されるが、原材料、加工賃を合わせたパン価格は、1.2%程度の値上げが見込

まれる。

#### イ. 学校給食用めん

めん価格（ソフトめん、中華めん）は、小麦粉、加工賃等の合計額である。加工賃は今後めん協力会と協議して決定されるが、1.2%程度の値上げが見込まれる。

うどん価格も、国産小麦粉、加工賃の合計額であり今後めん協力会と協議して加工賃が決定されるが、国産麦価格の値上がりにより6.8%程度の値上げが見込まれる。

### (2) 米穀関係

#### ア. 精米

平成20年産米の作柄指数は（やや不良）であった。

平成20年産米価格は、平成20年度当初（平成19年産米）に対し約4%程度の値上げとなった。

これは、燃料費、肥料等の値上げによるものである。

新年度の価格は、2月末に全農県本部、岡山パールライスと交渉して決定することとなる。

玄米価格については、据え置きが見込まれるが、検査料（玄米・精米・鮮度検定）が値上げとなるため、精米価格は若干の値上げが見込まれる。

#### イ. 委託炊飯

委託炊飯加工賃は、パン加工賃と同様、今後パン組合と協議して決定されるが、加工賃と合わせた炊飯価格は、平成20年度当初に対し2.8%～3.0%程度の値上げが見込まれる。

#### ウ. 米加工食品

アルファー化米は据え置きの見込みである。

アルファー化赤飯の価格は、約1%の値上げが見込まれる。

#### エ. 強化白麦等

価格は、約19%の値上げが見込まれる。

## 2 牛 乳

平成21年度の牛乳価格は、各供給乳業者から県下30区域毎の見積書が提出され、この見積価格により県内平均供給価格が算定される。

昨年は、原乳価格の値上げがあり、それを踏まえた値上げが予想される。

## 3 常温物資

### (1) 食用油

植物油を取り囲む環境は、過去に無い記録的な上下動を見せた1年となった。人口増加による需要増加に加え、バイオ燃料需要、及び原油市場に代表される商品取引市場への投機資金の流入が要因となり、価格は上昇を続けた。

その結果植物油の主要原料である大豆、菜種は昨年7月に史上最高値を更新。未曾有の上昇は続くかと思われたが、その後状況は一変。

9月の米国サブプライムローン破綻から端を発する世界的金融不安が拡大していくと、商品市場からの投機資金の流出が加速し、前述の大豆・菜種は12月にはピーク時の実に50%にまで下落した。このような激しい値動きは本来、生産量と需要量という要因にて上下する穀物価格が、需給を全く無視し投機資金によって上下した事を如実に現していた。

本来の価格変動要素である需給面においては、大豆、菜種共に昨年比増産が予想されている。これは価格上昇により農家の作付け意欲が増加した事、主要産地において天候に大きな不安が無く推移した事が起因している。しかしながら、油脂需要自体の増加は着実に進んでおり、生産量が増加したとはいえ世界的な穀物需給に余裕は無く、今後昨年後半のような大きな下落は考えにくいとされている。

### (2) 砂 糖

我が国の経済は、円高や証券市場の暴落に加えてエネルギーや鉱物、農産資源の高騰などの影響を受け、企業成績の下方修正や個人消費の減退が顕著となり景気後退局面に入ったと推測される。こうした状況下、砂糖業界は成熟した需要の中でメーカーそれぞれが、昨年同様に適正価格の維持と安定した供給が求められる。

### (3) 乳 製 品

国内の酪農経営状況は、昨年4月から生乳取引価格が引き上げられたものの、更なる穀物の高騰による飼料価格の上昇等、極めて厳しい状況が継続し、生産基盤の弱体化から離農する生産者が増え、特に都府県では生乳生産量が回復しない状況にある。

#### ア. チーズ

輸入原料チーズの価格は高値安定で推移してきたが、3月から国内飲用乳価が引き上げられることからチーズ原料の生乳価格も値上げとなる。よって、完成品のチーズについても値上がりの可能性が高い。

#### イ. ヨーグルト

健康志向や予防医学に対する社会的関心が高まる中、乳酸菌の可能性が評価される土壌が熟成されてきた。今後、乳酸菌やビフィズス菌研究が進行し、研究成果を反映したものが登場した場合、想像以上の成長となる可能性もある。

### (4) 缶 詰

#### ア. みかん缶（国産）

今年度は柑橘類裏年ということもあり、昨年末現在において全国各パッカーの製造数量は全国的に前年比60%となっている。それに加え、原料歩留りは非常に悪く、前年同期比生産量の7割の出来高となっている。原因としては昨年夏季の雨により急速に玉伸びしたことにより果実が軟弱で加工中に実崩れが起きていることによる。また、高齢化によるみかん農家の減少、かつて国内に260社あった加工業者も現在は9社と減

少している。近年、他メーカーによるカナダへの輸出みかんの取扱いははじまり原料調達段階での競争激化等により原料価格の高騰が懸念されている。

#### イ. 麻笥 (岡山県真備産)

昨年、国産たけのこは不作であった。今年の予想は竹が根をはる昨年の秋口(9~10月)にかなりの降雨量があったため、収穫量の増加が予想されている。が、国産志向による需要量増加での価格上昇が懸念される。

#### ウ. パイン缶 (タイ産)

昨年10月より質・量ともに好転し、チョイスグレード(日本向けの高級グレード)の比率は低いものの、各パッカーとも例年並みに近い生産が進んでいる。原料価格については下落している。価格下落の主な要因としては世界規模の景気後退により欧米向けの主であるスタンダードグレード(通常グレード:白っぽい実も入る)の需要が大きく減少し、大幅な値下げが行われている。今後、大きな気候変動がなければ例年並みの収穫が期待できるが、原料価格下落により、農家が十分な手入れを行わないという懸念があり、その結果、品質低下で日本向けのチョイスグレードの比率が、今後、減少することが懸念される。

#### エ. マッシュルーム (岡山県牛窓産)

この一年間で加工用原料が約20%値上がり、更に4月から若干の値上げの通告がある。これは栽培コストの上昇よりも、加工用需要の増加が原因と思われる。結果として若干の値上がりが見込まれる。

#### オ. うずら (国産)

中国産うずら卵の需要は落ち込んでおり、輸入量は減っているが、外食などでは、問題なく中国産が使われている状況である。

一方、本会取扱いの国産品については、ここ数年、バイオ燃料問題等により配合飼料は高騰を続け、養鶏(ヨシユ)農家の経営を圧迫し、廃業する農家や倒産する飼料メーカーもでたが、今年に入り、ようやく配合飼料の高騰は止まり、若干の下降状態にある。しかし、この春先には雛の入れ替えが行われる。雛の価格は昨年と比べて値上がりしており、飼料価格が下がっても、生産にかかわるコストは直ぐには下がらない状況である。

#### カ. ツナ缶

一昨年に引き続き昨年9月までは原料不足の年となった。しかしながら、世界的不況が起これ急激な円高等により日本からタイ等に輸出されていたマグロ加工原料が日本国内に滞ってしまい、水揚量は増加する結果となった。原料価格は平均で昨年比15%高で取引されている。今後の見通しは欧米の不況が終わらない限り、原料供給過多の可能性はある。しかしながら、このまま円

高が継続すれば日本から輸出していた業者は厳しい状況になることも予想される。

#### (5) 乾物

##### ア. 乾椎茸

(国産)19年度の春子生産(2~5月収穫品)は前年比80%と大巾減産。中国産の不信と相まって国産需要が大きく増加し相場は高値の一途をたどった。20年度春子生産量は18年度には及ばないものの前年対比120%となった。価格面は国産需要増加により高値のまま推移した。年が明け気温は順調に下がっているが降雨不足が心配されている。

(岡山県産)昨年末の作柄は、有効ほだ木本数の減少と極端な暖冬による低温刺激不足などで不作の様相を呈している。なお、正月明けから芽切りがあり今後が期待されているが、寒さで枯死する可能性もあり作柄予測が困難な状況である。いずれにしても有効ほだ木数の減少もあり、昨年作の確保は困難と思われる。価格面では、現状は高止まりであり、日本産志向が高まっているが昨年並みの価格を見込んでいる。

##### イ. 三陸産わかめ

昨年度の三陸産わかめは、鳴門産の産地偽装問題と中国産冷凍ギョーザ事件との影響から需要が三陸産に向い前年比2倍以上の高値になり未曾有の相場展開となった。本年度の三陸産わかめの生産は年末から年明けにかけて順調に冷え込み、新わかめの生育は品質・作柄共に順調に進んでいる。価格面は昨年の大巾な高値から一部繰越在庫も発生しており、2月5日の初入札では冷静な価格とのなることが予想されている。

##### ウ. 海苔

本年度の新しい生産は、瀬戸内海地区(兵庫・岡山・広島・山口・香川・愛媛・徳島)がここ数年の傾向として11月から12月中旬過ぎまでの高水温のため生産が2週間から1か月遅れと、昨年同様遅いスタートとなった。品質的には瀬戸内各地とも、まずまずの製品となり数量も安定している。昨年末以降、気温も下がり生育も順調に進んでいる。しかしながら降雨不足から岡山県に於いては西部地区から、香川県、広島県の各々一部から、早くも栄養塩不足による色落ちの始まっている地区もある。このまま降雨不足が続くと急速な色落ちの拡大が懸念されるため、今後、適度な降雨による品質回復が望まれる。今漁期も生産が中盤に入るが栄養塩不足による色落ちの拡大や、全国的に大きな気象変化や有害プランクトンの異常発生等により大幅減産となるような事態にならないかぎり安定した価格で推移するものと思われる。

##### エ. 煮干

昨年の香川県伊吹島・観音寺地区に於いては7月中旬から8月下旬まで中~中下級品が中心で量的には順調な漁が続き、9月に入

り油物が多くなり、更に燃料代の高騰により漁をしても採算割れの状況になったため、終了となった。結局、前年比、若干の増産。価格面は中下級品が安値安定、中級品以上は高値と二極化した。今後、この状況は新もの生産期（7月下旬）まで続くものと思われる。

## 4 畜産物

### (1) 学校給食用輸入牛肉（オーストラリア産）

価格については、現在交渉中であるが、据え置きが見込まれる。

使用部位について、一部変更となる予定である。

### (2) 国内産牛肉

昨年6月から11月までの国産牛肉（枝肉卸価格和牛A4；大阪市場）は、平均1,920円/kg、高値で1,973円/kg、安値で1,850円/kgで推移した。

今後も、高値安定が続くことが見込まれる。

### (3) 豚肉

昨年のお阪市場（6～11月）の枝肉卸売平均価格（並）は、476円/kg、高値で548円/kg、安値で360円/kg、で推移した。

今後の生産出荷予測は、微増が予測され、価格については、横ばいに推移すると見込まれる。

### (4) 鶏肉

昨年夏以降は、輸入鶏肉の急増により年末に向かって下降するというかつてない展開となった。

昨年（加重平均：主要都市国産鶏肉市況価格）では、もも肉715円/kg、むね肉334円/kgと高値で推移した。

今後は、配合飼料価格の値下げ予想、輸入物を中心とする過剰在庫などの不安材料を抱えている。

このため価格は、弱含みに推移すると見込まれる。

### (5) 鶏卵

卵の価格は、生産量が増える3～4月、需要が減退する6～7月に低落し、生産量が減る2月と需要が増える9月、11～12月に高騰する。

昨年の4月から12月の平均価格全農M基準値：大阪相場）は、185円/kg（19年179円/kg）となった。

今後の価格については、景気の悪化による消費の冷え込みが予想され、弱含みに推移すると見込まれる。

## 5 冷凍物資

### (1) 水産物

#### ア. キハダマグロ

海外における魚の消費量が牛海綿状脳症や鳥インフルエンザによる食肉不安を理由に増加し、特に中国ではここ20年間で魚介類の消費量が5倍となっている。このこと

から、日本は原料購入価格に高値をつける欧米やアジア勢に買い負けることが多く、結果として国内搬入量が減る傾向にある。

また、他国では大型巻網船により、小型のキハダマグロ等も捕獲の対象になるため、キハダマグロの減少に繋がる。巻網漁業全体の漁獲は近年では20万トンを超えることが多く、日本などで行っている延縄漁の約3倍の漁獲高となっている。このため、キハダマグロの捕獲地であるインドネシアの漁獲推移を調査したところ、2002年をピークに漁獲高は半分程度までに減少しており、価格は強含みが予想される。

#### イ. 紫いか・するめいか

三陸沖を含む北太平洋で漁獲されるムラサキイカは、漁獲量としては前年並みであるが、中国問題等で国内需要が急激に伸び浜値は高値で推移した。今年も、国内原料・国内加工の需要傾向は依然として大きいと思われる。このことから、漁獲が大幅に伸びない限り、価格は強含みが予想される。

また、するめいかは、主漁場である三陸・北海道沖において、前年を大きく下回る水揚げとなったにも関わらず、浜相場はさほど変化はなかった。依然として国内志向が強まる中で、搬入は前年並みと思われる。このことから、よほどの不漁でない限り、価格は横ばい安定と予想される。

#### ウ. むきえび

ベトナム産・ミャンマー産等、主な東南アジア各国で水揚げされる小型むきえびに関しては、為替の影響により若干の値下がりはあるものの年々厳しさを増す日本の品質要求に対し、どの国においても検査費、工場の改修、新規機械の導入、製品の品質面向上のための人件費の高騰等で工場側に更なる負担増となっているという現状があり、現地原料価格は値下がる見込みはないと考えられる。今後の状況としては為替の影響でどう変化するか、不明な点はあるが、価格は横ばいで推移すると考えられる。

#### エ. いわし

20年の全国の真イワシの水揚げ量は、農林水産省の産地水産物流通統計によると、累計で15,369トン（11月現在）であり、前年同期の累計は40,910トンで、3分の1までに減少している。価格は、高値で推移すると予想される。

#### オ. うなぎ

愛知県のシラス池入れ数を前年と比較すると、前年は49軒（2,600kg）、今年は67軒（3,500kg）となっている。生産者1軒あたり1割から1割五分多く池入れしている。シラス価格も、前年同期90万円/kgに比べ今年27万円/kgと値下がっている。

また、中国産うなぎの消費の悪化に伴い中国の生産者の池入れ意欲が無く池入れが

減少。それと毎年、韓国に10トンのシラスが池入れされるが、世界経済の不況で韓国ウォンが安く、韓国にシラスが入れられないこと、荷余りな感じである。かといって国内の池入れキャバは決まっています池入れできるだけの池がない。シラスが豊漁で安くなっても、入れる器が変わらないため、国内の生産量は毎年2万トンから2万5000トンしかないということになる。このようなことから、需要期の夏場まで、活鰻相場は横ばい安定。夏過ぎから今の安いシラスの活鰻が出荷されるため活鰻相場は値下がりが見込まれる。

## (2) 農産物

### ア. コーンカーネル (北海道産)

とうもろこしの作付け面積はここ数年で36,000haから38,000haへと増加傾向にあり、収穫量も180万から200万トンで推移してきた。ただしそのほとんどが家畜の飼料で、冷凍ホールコーンの生産は7~8,000トンで、あまり増減は見られなかった。

しかし、20年度は夏場の低温障害により、開花・受粉に大きなダメージを受けその後回復したものの収穫量は大幅に減少し、冷凍ホールコーンの生産量も20%程度減少していると思われる。

20年度は産地偽装の多発により、あらゆる食品業界が北海道産を求め殺到しており、価格は強含みが予想される。

### イ. いんげん (北海道産)

19年度は作付け面積1,000ha、収穫量は2,100トンであった。20年度も作付け面積に大きな変化はないが、夏場の低温障害の影響を大きく受け、その後回復の兆しがないまま収穫期を迎えた。前年比30%以上の減少と思われる。

北海道産の引き合いが強く物量の確保に苦慮する状況であり、価格は強含みが予想される。

### ウ. 里芋 (国産)

九州産里芋は各シーズンごとに原料を手当てし、そのシーズン中に加工し出荷する。輸入品のようなシーズンバック（半製品からのバック）は行なわれていない。

中国からの差替え需要で、今シーズンも8月盆明けの早生から原料芋の価格が上昇。生産者は加工業者に対し、早い時期からの原料手当てを促し、高値で取引されたが、冷凍加工向けの小型サイズは極端な玉不足に陥ってしまった。こうした状況は今後も続くとみられ、加工業者側は高値原料の歩留まりアップを図るため、大型サイズの加工を要望している。来期に向けては乱切りタイプも検討していかないと量の確保も困難な状況となっている。価格は高値安定と予想される。

### エ. ほうれん草 (国産)

9月・10月上旬播きが、播種後、雨が多

く発芽不良と病気のため鋤き込みを行い、その後播き直しを1~2回行ったが、乾燥と夜の寒さのため生育が遅れ収穫時期も大幅に遅くなり、背丈の短い物から出荷しているため、原料の入荷量が減ると思われる。価格は原料産地の老齢化、資材価格の値上がり及び原料不足により強含みが予想される。

### オ. 冷凍みかん (国産)

今年は、裏年であるが、昨年なりすぎたことから木が疲れ、予想以上に減少している。サイズは大型傾向で、小玉サイズが高値で取引されている状況である。

価格は、一昨年の裏年より若干値上がると予想される。

## 6 生鮮野菜・果実

平成19年の台風到来は少なく、各地とも直接の被害はなかったものの降雨等により作柄に影響が出た。

冬は雪が多く寒い日が続いたが、意外に春が早く到来した。4月以降、一時低温に見舞われることがあったが、全体として天候に恵まれ降水量は少なく、気温は高温で推移となった。この傾向は7月~9月前半まで続き、作柄に影響がみられた。秋以降は雨量が少ないものの周期的な降雨により植え付けや種まきの遅れ、また、果菜類に作柄不良の影響が見られた。しかし、概ね野菜全般については順調に入荷し、価格は安定推移の一年であった。果実については柑橘類が裏年（一年毎に表裏を繰り返す、裏年には一般的に収量が減る）で大玉傾向ながら堅調な推移となり、柿類は表年であるため多少安値で推移した。全般的には着色遅れ等が見られたものの順調な入荷となった。年々異常気象が生じており、目がはなせない状況になっている。

### (1) メークイン

北海道の作付け面積は30,536haで生食向けの男爵・メークインは前年に比べ480ha減少。一方、トヨシロほか加工向けが増加している。順調な天候推移と適度な降雨を受けたことから生育は順調となっている。しかし、作柄は例年を上回る玉付きから小玉傾向となっている。入荷量は前年より減少しており、価格も高値推移である。今後の天候にもよるが、新物の順調出荷がみられれば、例年並みの価格が予想される。

### (2) 玉葱

北海道の作付け面積は12,214haと、ほぼ昨年並みとなっている。天候に恵まれ肥大も良好となっており、出荷量も前年並みとなっている。価格については需給調整（早出し）対策を行い、前年並みの動きとなっている。今後の天候にもよるが、新物の順調出荷がみられれば、例年並みの価格が予想される。

### (3) キウイフルーツ

国産主要7県の栽培面積は1,246ha（前年比99%）、予想生産量は20,608トン（前年比

111%)であり、開花期の天候が良く着果量は多い。果実肥大も前年並みの状況である。品質は、平年並み～やや良い状態であり、糖度についても高糖度であった昨年と同等レベルになっている。品種別では、テイワードは減少傾向。レインボーレッドは増加傾向になっている。価格は昨年並みと予想される。

#### (4) りんご

青森産「サンフジ」については「つる割れ果」が多く、「つる割れ果」は昨年優先出荷となった。青森産主体の「サンフジ」は1月以降県全体で117,697ト(前年比113%)の在庫となっている。20年度サンフジは全体に着色がよく、食味も良好に仕上がっている。品質保持を徹底するため、褐変センサーを活用し、褐変果の出荷防止を徹底する対策がとられる。昨年末の大玉選果から年明けから40玉中心の小玉選果に移っている。価格は等階級にもよるが若干の安値が予想される。

## 7 保護者負担の学校給食費

### (1) 平成20年度の学校給食費

平成20年度における本県の学校給食の実施

に必要な経費のうち保護者負担の平均月額、表1のとおりであり、1食当たりの平均価格は表2のとおりであります。

### (2) 平成21年度の学校給食費

平成21年度の学校給食費の主食(牛乳を除く)は、20年度当初と比較すると、約2.5%から3.2%の値上がりの見込みである。

また、県下の学校給食費のうち副食費の本会のシェアは概ね20%程度であるが、本会の取扱う副食向けの物資で副食費の価格変動を推計すると、単純平均で3.6%の値上がりとなる。

平成21年度の学校給食費は、表3のとおり牛乳の値上がりを見込まない(原乳価格は値上げ)とすると2.8%~3.0%程度の増額を見込めば前年度の水準は維持できる計算となる。

平成21年度の学校給食費の設定に当たっては、今後決定する牛乳の保護者負担額、食事内容の充実、県下平均額との対比を考慮するとともに、今後の物価動向を踏まえた措置が必要と思われる。

表1 学校給食費の平均月額

区分	年度	18年度		19年度		20年度	
		平均月額(円)	対前年上昇率(%)	平均月額(円)	対前年上昇率(%)	平均月額(円)	対前年上昇率(%)
全国平均	小	3,973	0.9	3,968	-0.1	-	-
	中	4,522	0.5	4,529	0.2	-	-
岡山県平均	小	4,271	1.7	4,260	-0.2	4,356	2.3
	中	4,781	2.2	4,813	0.7	4,909	2.0

表2 平成20年度1食当たりの平均価格

区分	小学校	中学校
主食(米飯・パン・めん)	47円55銭	53円64銭
牛乳	40円31銭	40円31銭
副食	163円44銭	197円06銭
合計	251円30銭	291円01銭

(注) 岡山県教委調査の合計額をもととした県学校給食会の推計である。

表3 学校給食費の内訳別上昇見込率(平成20年4月現在との比較)

区分	小学校			中学校		
	20年度構成比(%)	21年度見込比率(%)		20年度構成比(%)	21年度見込比率(%)	
		自校炊飯	委託炊飯		自校炊飯	委託炊飯
主食(米飯・パン・めん)	18.9	103.2	102.5	18.4	103.2	102.5
牛乳	16.0	100.0	100.0	13.9	100.0	100.0
副食	65.0	103.6	103.6	67.7	103.6	103.6
合計	100.0	102.9	102.8	100.0	103.6	102.8

(注) 1. 県学校給食会で独自に推計したものである。

2. 主食の週当たりの実施回数は、米飯 3.00回 パン 1.31回 めん 0.69回 と推定した。

3. 牛乳は、入札の結果で今後価格が決定されるため、この推計では価格変動を加味していない。